

自然教育園の動物目録の追録と 稀種動物の目撃記録 (14)

久 居 宣 夫 *

Notes on Newly or Rarely Observed Animal Species
in the Institute for Nature Study (14)

Nobuo Hisai *

は じ め に

今回は、2001年1月～2003年12月に新たに生息が確認されたり、目撃された種あるいは前報（久居, 2001a）までに記録がもれた種について報告する。稀種については、「動植物目録」（国立科学博物館附属自然教育園, 1984）中で、r: “稀”, または (r): “古い記録はあるが、現在未確認の種” とされている全ての種を対象にしたが、これら以外にも最近特に個体数や目撃記録が著しく減少した一部の種も対象とした。

なお、学名及び和名などは原則として上記の目録に準拠した。カッコ内の日付は目撃あるいは捕獲した西暦年月日と目撃または捕獲地点及び目撃者、捕獲者名を示し、氏名のない場合は著者の記録によるものを示す。

本報告をまとめるにあたって、同定の労を煩わせた国立科学博物館動物研究部の大和田 守氏、同友国雅章氏、北海道立水産孵化場の伊藤富子氏、北海道余市町の石田昭夫氏、淡水魚類研究者の君塚芳輝氏、また、日頃より貴重な情報を提供してくださった下記の方々に感謝の意を表する次第である(50音順、敬称略)。

大澤陽一郎 (YO), 岡 孝男 (TO), 奥津 励 (RO), 桑原香弥美 (KK), 三枝近志 (CS), 菅原十一 (TS), 須田研司 (KS), 萩原信介 (SH), 藤田明嗣, 藤村 仁 (HF), 三浦和真 (KM), 武藤幹生 (MM), 矢野 亮 (MY), 吉井三恵子 (MYO), 吉野由美子 (YY)

1. 追 録

Arthropoda 節足動物門

Crustacea 甲殻綱

Macrocylops fuscus (Jurine) (ケンミジンコ目 ケンミジンコ科)

Macrocylops distinctus (Richard) (ケンミジンコ目 ケンミジンコ科)

* 国立科学博物館附属自然教育園, Institute for Nature Study, National Science Museum

Eucyclops pacificus Ishida

(ケンミジンコ目 ケンミジンコ科)

Eucyclops roseus Ishida

(ケンミジンコ目 ケンミジンコ科)

Paracyclops fimbriatus (Fischer)

(ケンミジンコ目 ケンミジンコ科)

Paracyclops chiltoni (Thomson)

(ケンミジンコ目 ケンミジンコ科)

Cyclops kikuchii Smirnov

(ケンミジンコ目 ケンミジンコ科)

Diacyclops bicuspidatus (Claus)

(ケンミジンコ目 ケンミジンコ科)

Diacyclops crassicaudis (Sars)

(ケンミジンコ目 ケンミジンコ科)

Bryocamptus zschokki (Schmeil)

(ソコミジンコ目)

上記のミジンコ類は、いずれも
2002.2.15 に北海道立水産孵化場の伊
藤富子氏がサンショウウオの沢や水生
植物園、ひょうたんの池 (図1 参照)
で落葉とともに試料を採集し、石田昭
夫氏が同定したものである。

これらのうち、*M. distinctus* は日本では戦前の山形県の1例と、青森県の記録に続く3例目である。
また、*P. chiltoni* は2000年に東京都国立市で初めて見つかり、北海道余市郡余市町、岩手県九戸郡種
市町に次ぐ4例目の記録、そして、*D. crassicaudis* は北海道から九州まで広く分布するが、東京では初
記録であるという (石田、私信)。

Arachnida 蛛形綱

Phintella versicolor (C. Koch) メスジロハエトリ (真正クモ目 ハエトリグモ科) (2002.4.9 教育管理
棟内) 小野展嗣氏同定

本種の雌が筆者の衣服についていたのを室内で捕獲したものである。その直前まで園内で作業をして
いたので、おそらく野外で衣服についたものが持ち込まれたのであろう。生息場所は低木の枝葉や生け
垣などで、個体数は少ない (千国, 1989)。

本種は当園に生息する可能性があると考えられていたクモの一種である (小野・新海, 2001)。

Insecta 昆虫綱

Graphosoma rubrolineatum (Westwood) アカスジカメムシ (半翅目 カメムシ科) (2003.9.28 あず
まや付近)

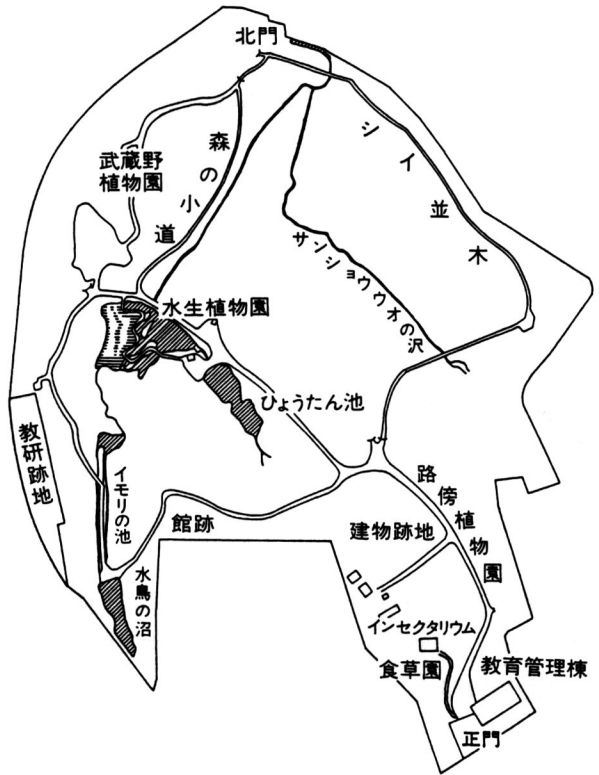


図1 自然教育園概略図

水生植物園のあずまや付近に生育するノダケにいた個体を捕獲。本種は普通種であるがこれまで記録されず、当園では個体数は少ないと考えられる。シシウドやノダケなどのセリ科植物に寄生し、丘陵地や海浜近くでは数個体が群れているのが見られる。

日本での分布は北海道～南西諸島である。

Acanthosoma giganteum (Matsumura) オオツノカメムシ (半翅目 ツノカメムシ科) (2003.4.27 インセクトリウム内) 友国雅章氏同定

インセクトリウム内の網戸に止まっている個体を捕獲。都区内では稀な種である。

幼虫はケンボナシで成育し、成虫はミズキなどにも集まる。最近、成虫が卵を保護する習性があることが明らかにされた (安永他, 1993)。寄主のケンボナシは、多くはないが園内にも生育しており、「森の小道」には大径木もある。

国内での分布は本州～九州である。

Anaciaeschna martini (Selys) マルタンヤンマ (蜻蛉目 ヤンマ科) (2001.6.28 水生植物園 KS; 7.13 水生植物園 KS; 2003.8.31 KS)

夕方水生植物園を多个体飛翔するのが見られる。2003.8.31 の記録は1♂を捕獲したものである。

本種の幼虫は平地や丘陵地の水生植物が多く生育する池沼に生息するが、時には神社内の池にも発生する (石田他, 1988)。

本園では2001年よりしばしば観察されることから、水生植物園で繁殖しているものと考えられる。最近、都区内の緑地でも時々見られるようになったという (須田, 私信)。

国内では岩手県・佐渡島及び関東地方以西・種子島・屋久島までの記録があるが、産地は限定され、特に北部では稀である (浜田・井上, 1985)。

Aeschnophlebia longistigma Selys アオヤンマ (蜻蛉目 ヤンマ科) (2003.5.29 水生植物園 KS)

本種も最近本園で見られ始めたトンボの一種で、上記は2個体目撃した記録である。

幼虫はヨシ・ガマなどが生育する平地や丘陵地の古い池沼に生息し、水生植物や水底の堆積物につかまって生活する (浜田・井上, 1985; 石田他, 1988)。

国内では北海道南部～熊本県までの記録があるが、産地が局地化しており稀である。皇居では発生時期には多個体が観察されている (友国・斎藤, 2000)。

Georodes corniger (Ulmer) ツノカクツツトビケラ (毛翅目 カクツツトビケラ科) (2002.2.15 サンショウウオの沢)

本種は、伊藤富子氏が来園したおりに幼虫を採集し、さらにその幼虫を同氏が飼育して得た成虫によって同定された。

本種は東京で採集された標本をもとに記載され、標本は大英博物館にあるものの、採集地は東京ということ以外明らかではないとのこと。また、環境省の準絶滅危惧種になっており、東京では絶滅したと考えられていたという (伊藤, 私信)。

国内での分布は北海道・本州・九州である (Itou, 2001)。

Papilio memnon thunbergii Siebold ナガサキアゲハ（鱗翅目 アゲハチョウ科）（2003.9.4 水生植物園 HF；9.12 イモリの池 KS；9.13 路傍植物園；9.17 三叉路 KS）

9.12 の記録は1♂を捕獲したものである。上記の 2003.9.4 以前にも正門付近で矢野氏とともに本種らしいアゲハを目撃したがこの時は確認できなかった。本園では少なくとも3個体以上飛来したと考えられる。

本種は、近年北上を続けているチョウの一種として知られている。幼虫の食餌植物はウンシュウミカンやユズ・ナツミカンなどの栽培ミカン類が主である。

国内での分布は本州南西部・四国・九州・南西諸島である。

Narathura bazalus turbata (Butler) ムラサキツバメ（鱗翅目 シジミチョウ科）（2002.9.19 食草園；2003.6.15 建物跡地 SH；10.1 路傍植物園 KK）

本園で最初に見つかったのは食草園で、同時に2個体目撃され、そのうち1♀を捕獲。その後も稀に園内で観察されている。

前種と同様に近年北上を続けているチョウの一種として知られている。2000年9月には皇居内でも見つかり、隣接する北の丸公園では幼虫も観察されている（久居, 2001b）。本種は成虫で越冬するが、本園では越冬できず、世代を繰り返しながら北上した個体が夏～秋に飛来してくるものと考えられる。

食餌植物は主としてマテバジイで、本園では食草園と教育管理棟前に植栽されている。

国内での分布は本州（近畿地方以西）・四国・九州・南西諸島である。

Ivela auripes (Butler) キアシドクガ（鱗翅目 ドクガ科）大和田守氏同定

最初に見撃されたのは 2001.6.23 に正門付近である。以後毎年初夏に全園で大発生する（図2）。

年1化で6月ごろ成虫が出現する。卵で越冬し、幼虫は4月ごろ孵化する。老熟幼虫は5月下旬ごろに樹幹や近くの塀・壁などで蛹化し、約1週間で羽化する（山本, 1987）。

本種は羽が白く、大きさやひらひらと飛ぶようすから、モンシロチョウに見まちがわれるが、多くの個体はミズキの樹冠部を飛翔し、時には林間の中にも入り込む。

食餌植物はミズキ・クマノミズキで、前者は園内に広く分布する。

国内での分布は北海道・本州・四国である。

Sceliphron deformе nipponicum Tsuneki モンキジガバチ（膜翅目 ジガバチ科）（2002.6.21 KK；7.4 KK）

2001.8.30 に現業舎内の机の引き出しに作られた巣を見つけ、その中にいた蛹を飼育し、羽化させたものである。

本種は風雨のあたらない物かげなどに土でタコツボ型の幼虫室を作り、コガネグモ科を主に、アシナガグモ科やカニグモ科などを狩っている（岩田, 1982）。

国内での分布は本州・九州である。

Vespa ducalis Smith ヒメスズメバチ（膜翅目 スズメバチ科）（2003.9.26 水生植物園 KS）

本種の巣は地中や樹洞・屋根裏・壁の隙間などに作る。そして、アシナガバチ類の巣を単独で襲い、

幼虫や蛹を引き出して巣に運ぶ。このように、本種は食性をアシナガバチ類にのみ依存しているため、アシナガバチの生活史に同調し、発生は本州南部では女王は5月下旬から出現し、働きバチは7月下旬から羽化し、9月中旬には営巣活動を終え、スズメバチ類の中では営巣期間がもっとも短いという(松浦, 1995)。

国内での分布は本州・四国・九州などである。

Vertebrata 脊椎動物門

Osteichthyes 硬骨魚綱

Micropterus salmoides (Lacepède) オオクチバス (スズキ目 バス科) (水生植物園)

本種はブラックバスの名でよく知られ、釣魚として移入されたものである。近年、スポーツフィッシングの対象として、各地の湖沼や河川に密放流されて生態系の攪乱を招き、社会問題となっている。

本園には、2000年ごろ体長35～38cmの雌雄各1個体が放流されたものと考えられ、その子孫が現在も繁殖し続けている。なお、最初に放流された雌雄の成魚は、2001年6月に実施された捕獲作業のうちに500～600個体の稚魚と共に捕獲され、これについては矢野(2001)が詳細に報告している。

Misgurnus mizolepis カラドジョウ (コイ目 ドジョウ科) (2002.4.5 武蔵野植物園小池 TO) 君塚芳輝氏同定

武蔵野植物園の右側の小池にいたドジョウを本園の岡園長が目撃し、後日奥津氏と共に捕獲したものである。捕獲後、体長と体重を計測し、写真撮影してから通称「カワセミの池」に放流した。体長は約20cm、体重は64gであった。なお、本種は写真によって、頭長に比べて眼径が小さいことと口髭が細く長いこと、尾柄高が高いことなどからカラドジョウの雌と同定された(君塚, 私信)。

本種の自然分布域は韓国・中国・台湾であり、おそらく園外から持ち込まれて放逐されたものと考えられる。

Natrix vibakari (Boie) ヒバカリ (トカゲ目 ナミヘビ科) (1999.6.23 インセクタリウム付近 KK; 2002.10.17 路傍植物園 KK)

1999年に本種と考えられる体長約40cmの個体が桑原氏によって目撃されていたが、この時は確認されなかったため、記録を保留していた。後に路傍植物園で見つかった個体が写真に撮影され、本種と同定された(図3)。本園の近くにある池田山公園でも目撃されたとの情報もあり(藤田, 私信)、園内には以前から生息していた可能性が高い。

本種は、水辺や多少湿った場所に多く生息し、夕方あるいは曇りや雨の日によく活動し、カエル・ミミズ・魚などを捕食する(千石, 1979)。

国内での分布は本州・四国・九州・佐渡島・隠岐島・屋久島など。

2. 稀種の記録

(1) 昆虫類

Ceragrion melanurum Selys キイトトンボ (蜻蛉目 イトトンボ科) (2003.7.11 水生植物園; 8.11 YO; 8.24 RO)

1995年まではわずかながら毎年のように見られたが、最近は目撃例がなかった。

Ictinogomphus clavatus (Fabricius) ウチワヤンマ (蜻蛉目 サナエトンボ科) (2002.7.4 水生植物園 KM)

園内ではほとんど目撃されないトンボの一種である。上記の以外では、2000年8月に水生植物園での記録がある(須田, 2002)。これまでの記録から、園内では繁殖しておらず、一時的な飛来であろう。

なお、皇居では本種がしばしば目撃される。

Polycanthagyna melanictera (Selys) ヤブヤンマ (蜻蛉目 ヤンマ科) (2001.6.29 建物跡地付近 ; 2002.6.28 武蔵野植物園小池)

2001年の記録は、建物跡地の「カワセミの池」で羽化後間もない未成熟個体を目撃したもので、2002年の記録は羽化直後の個体を観察したものである。本種は個体数は少ないが、上記のように武蔵野植物園の小池や建物跡地にある「カワセミの池」で繁殖している。

Epophthalmia elegans (Brauer) オオヤマトンボ (蜻蛉目 エゾトンボ科) (2001.7.27 水生植物園)

これまでは園内では稀に見られる程度で、一時的な飛来であったと考えられる。今回は水生植物園で中齢及び老熟幼虫が数個体見つかったことから、年によっては本園で繁殖していると考えられる。

Amantis nawai Shiraki ヒナカマキリ (直翅目 カマキリ科) (2001.10.25 MM ; 10.27 MY ; 2002.9.1 KK 以上教育管理棟内)

本種は通常照葉樹林内で生息しているが、今回はいずれも教育管理棟内で目撃された。

Cryptotympana facialis facialis (Walker) クマゼミ (半翅目 セミ科) (2002.8.11 正門前 ; 2003.8.12 食草園 ; 8.26 教育管理棟 ; 8.28 正門前 ; 8.28 水生植物園 KK)

Alcimocoris japonensis (Scott) ウシカメムシ (半翅目 カメムシ科) (2001.3.18 食草園 MY ; 2003.4.18 食草園 KK)

本園での初記録は1989年で(久居, 1990)、それ以後稀に見られる。

Agriosphodrus dohrni (Signoret) ヨコズナツチカメムシ (半翅目 ツチカメムシ科) (2001.5.6 正門付近 MY) 友国雅章氏同定

正門からインセクタリウムに行く小道で、ムクロジの果実に群がる7~8個体を目撃し、その一部を捕獲した。本種は照葉樹林の落葉下や地表で生活するため、目撃することは少ない(安永他, 1993)。

国内での分布は本州・四国・九州・対馬である。

Acanthosoma denticaudum Jakovlev セアカツノカメムシ (半翅目 ツノカメムシ科) (2003.8.17 イモリの池付近の路傍 ; 10.16 水生植物園前の路傍)

最近の記録は1994年7月、食草園での目撃である。本園では少ない。

Physopelta gutta (Burmeister) オオホシカメムシ (半翅目 オオホシカメムシ科) (2003.6.6 インセクタリウム内)

1992年10月にインセクタリウムで初記録された種で、その後は目撃されなかった。

Papilio machaon hippocrates C. et R. Felder キアゲハ (鱗翅目 アゲハチョウ科) (2001.6.8, 6.27 水生植物園; 2002.6.11 水生植物園 YO; 8.29 水生植物園; 9.11 教研跡地 MY; 9.26 水生植物園; 2003.5.3 水生植物園)

2001.6.8は4齢及び終齢幼虫, 6.27は卵の記録である。また, 2002.8.29は卵の, 9.26は3齢及び終齢幼虫の記録, 2003.5.3も卵の記録である。

以上のように, 1999年以後本種は成虫以外に, 毎年水生植物園のノダケに産付された卵や幼虫の記録がある (図4)。

Papilio helenus nicconicolens Butler モンキアゲハ (鱗翅目 アゲハチョウ科) (2001.7.28 水生植物園 YO; 8.3 食草園 MY; 2003.8.11 路傍植物園 YO; 8.17 正門前; 8.25 路傍植物園 MY; 8.27 路傍植物園 KK; 8.28 正門前; 8.30 食草園)

Papilio macilentus Janson オナガアゲハ (鱗翅目 アゲハチョウ科) (2003.8.22 KS; 8.26 KS; 10.4 正門前 KS)

2000年以後は園内で繁殖していると考えられる。

Anthocharis scolymus Butler ツマキチョウ (鱗翅目 シロチョウ科) (2002.3.30 建物跡地 CS; 3.30 水生植物園; 3.31 建物跡地 MY; 4.2 建物跡地; 4.4 建物跡地 YO; 4.5 建物跡地; 2003.4.12 武蔵野植物園 KK; 4.13 水生植物園及び教研跡 各1ex MY; 4.18 食草園及び水生植物園 各1ex)

本種は1950年代からの記録が皆無であったが, 1984年に再見されて以来確実な記録としては1989年まで生息が確認された (久居, 1991)。しかし, その後は再度目撃記録が途絶えていた。今回, 園内の各所で比較的頻繁に目撃された。皇居では, 1996年以来, 発生時期には毎年かなりの個体数が目撃されている (久居他, 2000)。

Colias erate poliographus Motschulsky モンキチョウ (鱗翅目 シロチョウ科) (2002.6.7 水生植物園; 2003.8.22 KS)

2002年は新鮮な雌の記録である。本種は最近激減し, 年に1~2個体見られる程度である。

Lycaena phlaeas daimio (Matsumura) ベニシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (2002.4.5 食草園)

本種も最近激減した。以前は, 個体数は多くないが4~10月に食草園・水生植物園・教研跡地などで普通に見られた。食餌植物のスイバ・ギシギシは園内にふつうに生育している。

Lampides boeticus (Linnaeus) ウラナミシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (2002.9.26 水生植物園)
本種も以前は晩夏から秋にハギ類の花でよく見られたが, 10年程前から減少した。

Narathura japonica japonica (Murray) ムラサキシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (2003.9.28 路傍植物園 MY)

毎年ではないが, 稀に見られる。2003年9月には, 皇居吹上御苑の果樹園で多個体 (20個体以上) 発生しているのが観察された (久居, 未発表)。

Japonica lutea lutea (Hewitson) アカシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (2003.5.25 正門前及び水鳥の沼付近 SH; 5.30 正門前)

1999年に武蔵野植物園で生息が再確認された (久居, 2001a)。今回は正門付近や水鳥の沼などで数個体が目撃された。

Antigius attilia attilia (Bremer) ミズイロオナガシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (2001.5.26 建物跡地付近; 2002.5.22 水生植物園 YO; 5.30 食草園 CS; 2003.6.3 水生植物園 KS; 6.6 インセクタリウム付近; 6.15 正門前 3exs MY)

ほぼ毎年発生している。

Rapara arata (Bremer) トラフシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (2001.4.13 路傍植物園 MY; 4.15 食草園 MY; 6.19 路傍植物園 MYO; 6.28 路傍植物園及び建物跡地 各1ex MY; 6.29 路傍植物園 2exs MY; 7.3 三叉路付近; 7.4 三叉路付近 MY; 7.18 食草園; 8.2 路傍植物園; 2002.3.10 食草園 CS; 4.5 食草園 3exs; 5.29 路傍植物園 MY; 6.5 路傍植物園 MY; 6.8 武蔵野植物園; 6.29 路傍植物園 MY; 2003.4.18 食草園)

2002.3.10は暖冬によるもっとも早い出現記録である。そのため, 園内では珍しくキブシの花で吸蜜姿が観察された (図5)。

Takara hamada hamada (H. Druce) ゴイシシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (1986.9.4 武蔵野植物園 1♂SH)

記録がもれていた種で, 上記以後は目撃されていない。

Curetis acuta paracuta Nicéville ウラギンシジミ (鱗翅目 シジミチョウ科) (2001.7.2 水生植物園 MY; 2002.1.10 教育管理棟前庭 MY; 10.2 正門前; 10.10 食草園; 11.4 インセクタリウム付近; 11.8 インセクタリウム付近; 11.21 水鳥の沼 KK; 11.24 教育管理棟付近 YO; 2003.7.19 水生植物園 HF; 9.17 水生植物園; 9.18 水生植物園 HF; 9.18 正門前; 10.1 正門前)

本種も毎年見られる (図6)。

Libythea celtis celtoides Fruhstorfer テングチョウ (鱗翅目 テングチョウ科) (2002.3.14 路傍植物園 KK; 3.15 路傍植物園 MY)

個体数は少ないが稀に見られる。

Parantica sita nipponica (Moore) アサギマダラ (鱗翅目 マダラチョウ科) (2001.9.30 イモリの池 MY; 10.7 路傍植物園 MY; 2002.5.23 武蔵野植物園 KK; 6.15 建物跡地 TS; 8.22 建物跡地 MY; 9.27 水生植物園 YO; 9.29 路傍植物園 MY; 10.2 武蔵野植物園 KK; 10.13 路傍植物園 MYO; 2003.7.3 路傍植物園 MY; 9.26 武蔵野植物園 KS; 9.30 TS; 10.9 食草園 HF)

秋の記録の多くはタイアザミの花で吸蜜している個体である (図7)。

Argynnis paphia tsushimana Fruhstorfer ミドリヒョウモン (鱗翅目 タテハチョウ科) (2001.6.7 MYO; 6.26, 6.28, 10.2; 2002.9.23)

以上はいずれも水生植物園で記録されている。2001.6.26 はイヌヌマトラノオに5個体が吸蜜に集まっていた。

Argyronome ruslana (Motschulsky) オオウラギンスジヒョウモン (鱗翅目 タテハチョウ科) (2001.6.22 水生教材園 MM; 6.29 水生植物園 YY)

上記はおそらく同一の雌個体の記録と考えられる (図8)。ごく稀に見られる種で、最近では1995年10月の記録がある (久居・矢野, 2001)。本種は2001年に皇居でも記録されている (大和田, 私信)。

Argyreus hyperbius hyperbius (Linnaeus) ツマグロヒョウモン (鱗翅目 タテハチョウ科) (2003.10.31 水生植物園 KK)

1984年の目録 (国立科学博物館附属自然教育園, 1984) には登載されているが、その後の記録は全くない。土着の北限は日本海側が福井県南部、太平洋側が東海地方以西と推定されている (福田他, 1983)。

Apatura metis substituta Butler コムラサキ (鱗翅目 タテハチョウ科) (2002.8.29 水生植物園 KS; 2003.8.31 水生植物園 KS)

1952年の目録 (鶴田他, 1952) に登載されているが、その後の記録はなく、本園では絶滅したと考えられていた種である。今回は、それぞれ1個体ずつであるが2年連続で目撃されたことから、園内での発生の可能性も全くないわけではない。なお、最近三鷹市の井の頭恩賜公園でも本種が目撃されたという (須田, 私信)。

本種は、クヌギ・コナラなどの樹液によく集まる。また、雄は動物の糞にも飛来し、開けた川原や路上の湿地に降りて吸水することも多い (福田他, 1983)。本園での目撃場所は、いずれも広く開けた水生植物園であり、吸水に飛来した雄が見られたとも考えられる。

食餌植物はヤナギ類で園内にはふつうに生育している。

Kaniska canace (Linnaeus) ルリタテハ (鱗翅目 タテハチョウ科) (2001.4.6 食草園; 6.12 水生植物園 YO; 6.29 食草園; 8.12 食草園 MY; 8.28 食草園; 8.30 水生植物園及び建物跡地 各1ex MY; 2002.6.28 水生植物園 MY; 8.22 あずまや前; 8.25 あずまや前; 9.18 路傍植物園 KK; 2003.4.13 水生植物園 MY; 6.11 水生植物園付近 MY; 6.18 食草園; 7.31 食草園 KK)

2002.9.18は路傍植物園のホトトギスに付いていた終齢幼虫の記録である。本個体は桑原氏によって飼育され、10月1日に羽化し園内に放蝶された。また、2003年7月には水生植物園のシオデでも幼虫が見られた(図9)。

Cynthia cardui (Linnaeus) ヒメアカタテハ(鱗翅目 タテハチョウ科)(1999.5.29 CS)
前報までの記録もれである。

Vanessa indica indica (Herbst) アカタテハ(鱗翅目 タテハチョウ科)(2001.4.15 食草園 MY;
2002.5.16 武蔵野植物園)

1995年以後は毎年のように観察される。2002年は武蔵野植物園及び水生植物園のメヤブマオで幼虫の巣が多数観察された。

Choaspes benjaminii japonica (Murray) アオバセセリ(鱗翅目 セセリチョウ科)(2003.6.21 水生植物園 KS)

本種は、1984年9月の食草園での記録(久居, 1987)以後は、成虫あるいは幼虫の巣とも目撃されていない。今回は水生植物園の葉上で見られたが、成虫は飛翔性が強いので(福田他, 1984)、飛来個体の可能性が高い。

食餌植物のアワブキは武蔵野植物園と食草園に生育している。

Melanitis phedima oitensis Matsumura クロコノマチョウ(鱗翅目 ジャノメチョウ科)(2002.8.18 ひょうたん池付近 MY; 9.8 食草園付近; 10.25 正門前 CS; 10.26 正門前)

2002.10.25と10.26は同一個体と考えられる。

本種は、1987年10月に正門付近で初記録された(久居, 1989)。それ以来しばしば目撃される。

Actias artemis (Bremer et Grey) オオミズアオ(鱗翅目 ヤママユガ科)(2001.6.6 KK; 2003.5.29 三叉路付近)

2001年6月はミズキに付いていた幼虫の記録である。個体数は少ないが時々見られる。

Eumeta minuscula Butler チャミノガ(鱗翅目 ミノガ科)(2003.11.7 水生植物園 YO)

上記は、水生植物園でハンノキの幼樹に付いていた幼虫の巣の記録である。

ミノガ類は、これまでに発行されたいずれの目録にも記録されていない。ミノガ類としては、1997年5月にクロツヤミノガがインセクトariumで(久居, 1998)、また、本種は2000年6月に1♂が得られた記録があるにすぎない(大和田他, 2001)。

Eretes sticticus (Linnaeus) ハイイロゲンゴロウ(鞘翅目 ゲンゴロウ科)(2001.7.8 水生植物園 MM)

水生植物園で作業していたおりに捕獲されたもので、4~5個体いたという。

1952年の目録には、本種を含む8種のゲンゴロウ類が登載されているが、園内ではゲンゴロウやミズスマシなどの水生昆虫類については採集が困難なためにほとんど記録していない。そのため、それ

らの消長については不明である。

(2) そ の 他

Rana japonica japonica Günther ニホンアカガエル (無尾目 アカガエル科) (2001.8.31 武蔵野植物園)
夜間調査のうちに、武蔵野植物園のベンチ付近にいた体長約45mmの成体を捕獲した。

本種は、これまでに1963年3月と1978年ごろの2回目撃記録がある (国立科学博物館附属自然教育園, 1981)。これらが自然分布なのか放逐などによる人為的分布かは明らかではない。本種の繁殖地としてもっとも可能性がある水生植物園のミツガシワ植栽地付近あるいはイモリの池・武蔵野植物園にある二つの小池では卵塊・幼体が全く見られていなかったことから、今回捕獲された個体は園外から持ち込まれて放逐されたものと考えられる。

Dinodon orientalis (Hilgendorf) シロマダラ (トカゲ目 ナミヘビ科) (2001.7.15 インセクタリウム内)
本種は稀に見られる。

引 用 文 献

- 千国安之輔. 1989. 写真・日本クモ類大図鑑, 308pp. 偕成社, 東京.
- 福田晴夫他8名. 1983. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅱ). 325pp. 保育社.
- 福田晴夫他8名. 1984. 原色日本蝶類生態図鑑 (Ⅳ). 373pp. 保育社.
- 浜田康・井上清. 1985. 日本産トンボ大図鑑. 第2巻解説編:129-291. 講談社.
- 久居宣夫. 1987. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(1). 自然教育園報告, (18):41-44.
- 久居宣夫. 1989. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(2). 自然教育園報告, (20):1-13.
- 久居宣夫. 1990. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(3). 自然教育園報告, (21):11-21.
- 久居宣夫. 1991. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(4). 自然教育園報告, (22):1-6.
- 久居宣夫. 1998. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(10). 自然教育園報告, (29):13-17.
- 久居宣夫. 2001a. 自然教育園の動物目録の追録と稀種動物の目撃記録(13). 自然教育園報告, (32):31-37.
- 久居宣夫. 2001b. チョウの楽園、吹上御苑. 「皇居・吹上御苑の生き物」(国立科学博物館皇居生物相調査グループ編), 176-183. 世界文化社, 東京.
- 久居宣夫・矢野亮・久保田繁男. 2000. 皇居の蝶類. 国立科学博物館専報, (36):169-183.
- 久居宣夫・矢野亮. 2001. 自然教育園の蝶類. 自然教育園報告, (33):235-249.
- Itoh, T. 2001. Description of the type species of the genus *Goerodes* and generic assignment of three East Asian species (Trichoptera, Lepidostomatidae). *Limnology*, 2:1-9.
- 石田昇三・石田勝義・小島圭三・杉村光俊. 1988. 日本産トンボ幼虫・成虫検索図説. 72pls+105figs +140pp. 東海大学出版会, 東京.
- 岩田久二雄. 1982. 日本蜂類生態図鑑. 162pp. 講談社.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1981. 自然教育園の動植物目録. 自然教育園報告, (12):125-170.
- 国立科学博物館附属自然教育園. 1984. 国立科学博物館附属自然教育園動植物目録. 118pp.
- 松浦誠. 1995. [図説] 社会性カリバチの生態と進化. 353pp. 北海道大学図書刊行会.
- 小野展嗣・新海栄一. 2001. 自然教育園のクモ類. 自然教育園報告, (33):173-200.

大和田守・有田豊・神保宇嗣. 2001. 自然教育園の蛾類. 自然教育園報告, (33):251-280.

千国正一編. 1979. 原色両生・爬虫類. 206pp. 家の光協会, 東京.

須田真一. 2002. 自然教育園のトンボ類. 自然教育園報告, (34):107-130.

友国雅章・斎藤洋一. 2000. 皇居のトンボ. 国立科学博物館専報, (36):7-18.

鶴田総一郎他. 1952. 国立自然教育園動物目録第1集昆虫綱. 国立自然教育園基礎資料, (1):1-42. 国立自然教育園.

山本光人. 1987. ドクガ科. 「日本産蛾類生態図鑑」(杉繁郎編), 172-178. 講談社.

矢野亮. 2001. ギルとバスの密放流が生態系を攪乱. 国立科学博物館ニュース, (390):28.

安永智秀・高井幹夫・山下泉・川村満・川澤哲夫. 1993. 日本カメムシ図鑑(友国雅章監修). 380pp. 全国農村教育協会, 東京.

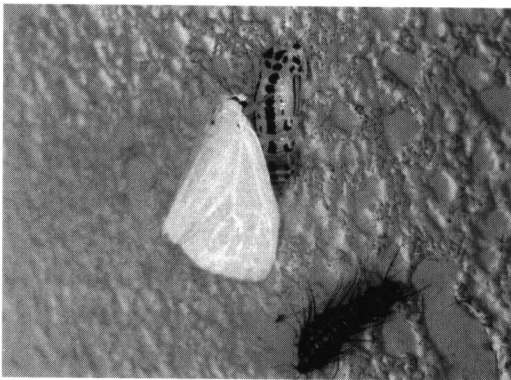


図2 羽化直後のキアシドクガの成虫と幼虫
(2003.5.24 吉野由美子撮影)

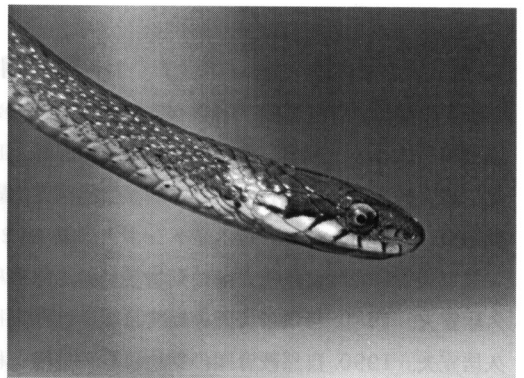


図3 ヒバカリ
(2002.10.17 桑原香弥美撮影)



図4 ノダケに付くキアゲハの幼虫
(2003.7.16 濱尾章二撮影)



図5 キブシで吸蜜するトラフシジミ
(2002.3.10 三枝近志撮影)



図 6 ウラギンシジミの雄
(2003.7.19 藤村仁撮影)



図 7 タイアザミで吸蜜するアサギマダラ
(2001.10.7 吉野由美子撮影)



図 8 オオウラギンスジヒョウモンの雄
(2001.6.29 吉野由美子撮影)



図 9 シオデに付くルリタテハの終齢幼虫
(2003.7.24 吉野由美子撮影)